

亭主像の諸相

——スガナレル像の変貌——⁽¹⁾

一之瀬正興

I. はじめに

文学の営為の一つが個性的な人物の塑像にあり、それを読者の心の中に典型人物として生き続けさせることにあるということができるとであろうか。モリエール Molière もさまざまな人物を創造した。その中で7篇の戯曲に同名で登場するスガナレル Sganarelle については、「スガナレルの系譜」⁽²⁾ですでに眺めた。モリエールの作品に初めて登場するスガナレルは、『飛び医者』*le Médecin volant* の中でコメディア・デラルテ *commedia dell'arte* の伝統にそったザンニ Zanni 型の下僕として医者に扮して縦横無尽に活躍して主人を助けるのである。この作品自体も人物像としての下僕のスガナレルも、モリエールの個性的才能を示すところはきわめて少ないのである⁽³⁾。モリエールはこのザンニ型の下僕を、『プルソーニャック氏』*Monsieur de Pourceaugnac* (1669) のスブリガニ Sbrigani や『スカパンの悪だくみ』*les Fourberies de Scapin* (1671) のスカパンに発展させていった。しかし下僕としてのスガナレルは『ドン・ジュアン』*Dom Juan* (1665) に再登場するものの、それまでの下僕像からは大分変貌した姿に変わった。このスガナレルについては、「Sosieの場合——*Amphitryon* と *Dom Juan* をめぐって——」⁽⁴⁾において、アンフィトリヨンの下僕ソジーと対比しながらすでに検討した。つまり、このスガナレルはザンニ型の下僕からは変身し、愚鈍で、無様で、融通のきかない性格が強調されていたのである。そしてこれを最後に下僕のスガナレルは再び新しい芝居に現われることはない。

さて、ここではその他のスガナレルが後続の作品の中でどのように変貌をとげ、いわゆるモリエールの人物にどのようにつながっていくのか、結

婚の過程を基準に検討してみよう。つまり、結婚前に振られてしまうスガナレルから、女房に死に別れ娘の結婚に心をくだくスガナレルまでである。

Ⅱ．振られた恋人または婚約者

『亭主学校』*l'Ecole des Maris* (1661) のスガナレルは独身であるが、やはり同じく独身の兄アリスト Ariste とともに、身無し子の姉妹レオノール Léonor とイザベル Isabelle の後見役をつとめている。二人の友人である彼女たちの両親から、生前いまわのきわに、二人の娘の養育と可能な場合は結婚を託されたのである。兄弟二人ともこの姉妹との結婚を望んでいるが、その態度や対応は対照的である。

まず兄のアリストの方は、女性に対して寛大で、女性の自主性を認めている。女性の貞節のあり方について、男性が厳しく監視しても無駄なことであるという。むしろ女性の責任感と自覚を重んじることこそ重要であると主張する。

[…]

Leur sexe aime à jouir d'un peu de liberté ;
 On le retient fort mal par tant d'austérité ;
 Et les soins défiants, les verrous et les grilles
 Ne font pas la vertu des femmes ni des filles.
 C'est l'honneur qui les doit tenir dans le devoir,
 Non la sévérité que nous leur faisons voir.
 C'est une étrange chose, à vous parler sans feinte,
 Qu'une femme qui n'est sage que par contrainte.

En vain sur tous ses pas nous prétendons régner :
 Je trouve que le cœur est ce qu'il faut gagner ;
 [...]⁽⁵⁾

そして姉嬢のレオノールに対してもこの方針を守り、彼女が少しばかり勝手にふるまってもすぐ叱責するようなことはしない。しかも若い娘には自由気ままだが必要で、それは認めざるをえない。レオノールの自主性を全面的に認め、自由に行動させておくというのである。

[...]

Mes soins pour Léonor ont suivi ces maximes :
 Des moindres libertés je n'ai point fait des crimes.
 A ses jeunes désirs j'ai toujours consenti,
 Et je ne m'en suis point, grâce au Ciel, repenti.
 [...]⁽⁶⁾

それに反して弟のsganarelは、厳格で、融通がきかず、利己的で、体面を重んじ、口やかましく、偏屈で、嫉妬深い。イザベルについては自分が責任をもつのであるから、自分の考えどおりにする。服装については流行はいっさい認めない。家にこもって家事に専念することが肝要。外の男性に口説かれないようにしっかり監視する必要がある。つまり額に角など生やし(コキュ cocu になって)体面を穢されたくないのである。兄のアリストに反論して述べる。

[...] Mais j'entends que la mienne
 Vive à ma fantaisie, et non pas à la sienne ;
 Que d'une serge honnête elle ait son vêtement,
 Et ne porte le noir qu'aux bons jours seulement,
 Qu'enfermée au logis, en personne bien sage,
 Elle s'applique toute aux choses du ménage,
 A recoudre mon linge aux heures de loisir,
 Ou bien à tricoter quelques bas par plaisir ;
 Qu'aux discours des muguets elle ferme l'oreille,
 Et ne sorte jamais sans avoir qui la veille.
 Enfin la chair est foible, et j'entends tous les bruits.
 Je ne veux point porter de cornes, si je puis ;
 Et comme à m'épouser sa fortune l'appelle,
 Je prétends corps pour corps pouvoir répondre d'elle.⁽⁷⁾

アリストの方がスガナレルより10数歳年上なのに⁽⁸⁾、兄の方が柔軟で弟の方が非常に保守的で、二人の人物がまったく対照的になっている。スガナレルの方が極端なまでに頑固な人間に描かれているのである。

ところが、このようなスガナレルの計画が成功するわけもなく、彼はみじめな仕返しを食うことになる。イザベル自らが監視人スガナルをまんまと利用して恋のとりもち役に仕立てあげ、青年ヴァレール Valère との恋を成就させてしまうのである。スガナレルは、二人の恋人の恋文をだまされて届ける役目を引き受け、ついには二人を会わせてしまうほど、間抜けでお人よしの許婚者なのである。さらに、イザベルは、姉のレオノールが

ヴァレールに恋をして結婚したがっているとスガナレルに思い込ませ、自分自らがレオノールに変装してまんまとスガナレルの家から抜け出してしまふ。このように、従順に育てたはずのイザベルがさんざんスガナレルを踏みつけにして、相愛の青年ヴァレールと結婚してしまうのである。

だまされたと気づいたスガナレルは、最後にイザベルを非難し、女性そのものを呪詛する。悪魔の化身でもこれほどの性悪女はなかろう。女というものは悪事にたけていて男を地獄に落とすようにできている。もう女性は懲り懲りで、嘘つき女なんかはみんな喜んで悪魔にくれてやるというて姿を消す。

[…]

Et je ne pense pas que Satan en personne
 Puisse être si méchant qu'une telle friponne.
 J'aurois pour elle au feu mis la main que voilà :
 Malheureux qui se fie à femme après cela !
 La meilleure est toujours en malice féconde ;
 C'est un sexe engendré pour damner tout le monde.
 J'y renonce à jamais, à ce sexe trompeur,
 Et je le donne tout au diable de bon cœur.⁽⁹⁾

こう叫んで皆から別れて消えていくスガナレルの姿は、滑稽をとおりこしてあわれをもよおすのである。

モリエールは1662年に『女房学校』*l'Ecole des Femmes* を発表したが、

これは女性の教育問題についての一連の論争をひきおこした。そこで翌1663年には敵方に答えて、『女房学校批判』*la Critique de l'Ecole des Femmes* と『ヴェルサイユ即興劇』*l'Impromptu de Versailles* を発表する。女性の教育問題はモリエールの演劇活動全般をとおしての主張であった。14年間の地方巡業後のパリ凱旋の翌1660年に発表した『笑うべき才女たち』*les Précieuses ridicules* はじめ、『女学者』*les Femmes savantes* (1672)などをみてもわかるようにモリエールは常にこの主題に関心があったのである。

モリエールはあの恋人に振られたスガナレルを『女房学校』のアルノルフ *Arnolphe* においてさらに一層戯画化していく。

『亭主学校』は、夫たちつまりアリストとスガナレルの女性に対するあり方を問うのが主題であるが、それは当然レオノールとイザベルの問題、つまり女性のあり方、女性の教育、結婚の考え方、家庭生活などの問題が表裏一体となっているといえる。一方、『亭主学校』の時期は、モリエールの個人生活においても結婚の問題は切実な関心事であったに違いない。1662年2月20日、40歳のモリエールは、20歳といわれているが19歳にすぎなかったかもしれないアルマンド・ベジャール *Armande Béjart* と結婚する⁽¹⁰⁾。伝記的事実と作品とのかかわりを必要以上に強調することはさけるべきであろうが、中年男と若い娘の恋愛や結婚はこの時期以後モリエールの主要テーマとなって頻出することだけはたしかである。

42歳のアルノルフは、アニェス *Agnès* を4歳の時に養子にして13年間自分の思うがままに養育して、近々結婚しようとしている。角を生やすこと、つまりコキユになることを最も不名誉とするアルノルフは、徹底した女子教育を主張する。つまり無教育という教育である。それゆえ理想的な

女房とは、うすのろで何の知識もない女だという。韻の何たるかを知らなくとも、夫を大切にして、針仕事ができれば充分だと主張する。アルノルフは、中庸を説く良識派の友人クリザルト *Chrysalde* に自分の理想の女房像を長々と述べ聞かせる。

[…]

Je prétends que la mienne, en clartés peu sublime,
Même ne sache pas ce que c'est qu'une rime ;
Et s'il faut qu'avec elle on joue au corbillon
Et qu'on vienne à lui dire à son tour : «Qu'y met-on ?»
Je veux qu'elle réponde : «Une tarte à la crème» ;
En un mot, qu'elle soit d'une ignorance extrême ;
Et c'est assez pour elle, à vous en bien parler,
De savoir prier Dieu, m'aimer, coudre et filer.⁽¹¹⁾

アルノルフはアニェスを「卑しい百姓の身分かられっきとした町娘の地位にまで引き上げてやった」⁽¹²⁾のを恩にきせ、強引に結婚を承諾させようとする。そして妻たるもののあり方を長々と説き聞かせる。その独善的な長広舌たるやみごとなもの。つまり女性というものは生まれながらにして男性より劣っている。そこで女性は男性に常に従わねばならない。妻たる者は夫に完全に服従しなければならないと説く。

[…]

Votre sexe n'est là que pour la dépendance :

Du côté de la barbe est la toute-puissance.
 Bien qu'on soit deux moitiés de la société,
 Ces deux moitiés pourtant n'ont point d'égalité :
 L'une est moitié suprême et l'autre subalterne ;
 L'une en tout est soumise à l'autre qui gouverne ;
 Et ce que le soldat, dans son devoir instruit,
 Montre d'obéissance au chef qui le conduit,
 Le valet à son maître, un enfant à son père,
 A son supérieur le moindre petit Frère,
 N'approche point encor de la docilité,
 Et de l'obéissance, et de l'humilité,
 Et du profond respect où la femme doit être
 Pour son mari, son chef, son seigneur et son maître.
 [...] ⁽¹³⁾

ところがアルノルフは、無知で従順に育てたはずのアニェスから手痛い
 仕返しを受ける。アニェスはオラース Horace を追い払うふりをして、
 小石と一緒に恋文を投げて自分の心の内を相手に伝える。これは『亭主学
 校』のイザベルの策略と同工異曲である。つぎにはアルノルフが突然現わ
 れたのでオラースを衣装戸棚に隠し、逢引きの約束をとりつける。逢引き
 の現場をのがれて窓から落ちたオラースは、アニェスと一緒に家出をして
 しまう。しかもオラースはアニェスの監視人がアルノルフであるとは知ら
 ず、これらの策略を全部うち明けてしまうのである。このような思い違い
 の滑稽味は、『粗忽者』 *l'Etourdi* のレリー Lélie の失策のように、モリ

エールの喜劇の常套的な手法でもある。

このように、何度裏切られても、アニェスに夢中なアルノルフは彼女をあきらめることはできない。アニェスの声や目差しに恨みの心もつい和らいでしまうアルノルフの心情たるやあわれである。これはスガナレルのように単に女性を呪うのではなく、恋する女性に負けてしまう男性の弱さ、つまりアルノルフ自身の弱さを呪いあざけることなのだ。

Ce mot et ce regard désarme ma colère,
 Et produit un retour de tendresse de cœur,
 Qui de son action m'efface la noirceur.
 Chose étrange d'aimer, et que pour ces traîtresses
 Les hommes soient sujets à de telles foiblesses!
 [...] ⁽¹⁴⁾

結末は、例によってモリエール劇の常套手段ともいえる偶然の一致による解決で、オラースとアニェスはめでたく結ばれる。そしてこの成行きを見て、アルノルフは言葉もなく立ち去っていく。

この女性に対する相矛盾する感情に苦悩するのは『ミザントロープ』 *le Misanthrope* (1666) のアルセスト *Alceste* である。ここでも中庸を説くフィラント *Philinte* とは対照的に、アルセストは全てに対し極端なまでに純粋で潔癖である。世間のあらゆる不正、不実、不合理にまともに挑戦する純情家である。だからこの世の中の全ての人間が敵になる。悪人を憎むのは当然として、悪人を憎悪しない人をもまた憎まなければならないか

らだ。

Non : elle est générale, et je hais tous les hommes :
 Les uns, parce qu'ils sont méchants et malfaisants,
 Et les autres, pour être aux méchants complaisants,
 Et n'avoir pas pour eux ces haines vigoureuses
 Que doit donner le vice aux âmes vertueuses.
 [...] ⁽¹⁵⁾

ところがアルセストが恋してしまった20歳の未亡人セリメーヌ Céli-
 mène は何人もの恋人をもつ社交人である。アルセストが望むような清廉
 潔白な女性ではない。しかしアルセストはそれが解りながらも、セリメー
 スをあきらめることはできない。むしろ彼女を悪から救い出してやろうと
 いうのだ。

Non, l'amour que je sens pour cette jeune veuve
 Ne ferme point mes yeux aux défauts qu'on lui treuve,
 Et je suis, quelque ardeur qu'elle m'ait pu donner,
 Le premier à les voir, comme à les condamner.
 [...]
 J'ai beau voir ses défauts, et j'ai beau l'en blâmer,
 En dépit qu'on en ait, elle se fait aimer ;
 Sa grâce est la plus forte ; et sans doute ma flamme
 De ces vices du temps pourra purger son âme. ⁽¹⁶⁾

しかしその計画も成功することはない。セリメヌはアルセストだけでなくオロント Oronte はじめ他の男たちをもだましていたのだ。それは衆人環視のうちに公になり、セリメヌはすべての人々からあいそをつかさされてしまう。

それでもアルセストはこのセリメヌの裏切りを許し、二人で人里離れたところで生きることを提案する。もちろんセリメヌのような女性がその申し出を受けることはない。すべてに絶望したアルセストは、この俗世間を離れ、正しい人間が生きられる土地を探すことに決める。しかしそのような場所は存在しないだろう。その不可能を求めてアルセストは出発しなければならない。

これほどまでの極端な潔癖さには喜劇性はすでになく、アルセストの悲壮な姿が強調され、むしろ悲劇性がみえてくるのである。

スガナレルーアルノルフの流れをほとんど完全な形で継承しているのが『シシリア人または恋は画家』*le Sicilien ou l'Amour Peintre* (1667) のドン・ペードル Dom Père である。『シシリア人』は国王の母后逝去の喪明けの饗宴の余興『詩神のバレエ』*le Ballet des Muses* の仕上げとして1667年2月サン=ジェルマン Saint-Germain の城館で初演されたものである⁽¹⁷⁾。これは、リュリ Lulli と共作のバレエや歌や踊りのはいつた娯楽的なコメディ=バレエ *comédie-ballet* であって、本格喜劇の『女房学校』などに比ぶべくもない。ただし、国王の火急の要望に答える場合に、この使いなれたテーマをうまく幕間劇と組み合わせたモリエールの腕前を評価すべきであろう。

シシリア人ドン・ペードルは、美しいギリシア人の女奴隷イジドール

Isidore を愛してしまい、解放した後結婚しようと決めている。だから他人からイジドルが気に入られることは許しがたいことになる。嫉妬心がつのとますます彼女を独占したくなる。イジドルが他の男に笑かけても眼を向けても許せないというのである。

[...] Mon amour vous veut toute à moi ; sa délicatesse s'offense d'un souris, d'un regard qu'on vous peut arracher ; et tous les soins qu'on me voit prendre ne sont que pour fermer tout accès aux galants, et m'assurer la possession d'un cœur dont je ne puis souffrir qu'on me vole la moindre chose.⁽¹⁸⁾

しかしイジドルも結構主人に対して活発に反撥して、主人の勝手なやきもちは迷惑であると言明するほどの女性として描かれる。このイジドルに懸想するのがフランス人貴族アドラスト Adraste であるが、下僕のアリ Hali と共に彼女を得ようと画策する。アドラストは画家に扮してイジドルに近づき、結局彼女を獲得してしまう。怒り狂うドン・ペードルが裁判官に訴えてみても、仮面舞踏会に夢中で取りあってくれない。そして二人の恋敵もコメディ＝バレエのモール人の踊りの輪の中に消えてしまつて、終幕となる。

ここでは許婚者をさらわれたドン・ペードルの嫉妬や悲嘆もみられるものの、スガナレルやアルノルフとは違った人物として提示されている。観客は、美しい恋人を手に入れるフランス人貴族のアドラストの策略を楽しみ、幕間の音楽や歌や踊りを喜ぶことに主眼があるのである。

Ⅲ. 結婚させられた男

『強制結婚』 *le Mariage forcé* (1664) に登場する53歳の町人のスガナレルは、社交好きで派手好きな貴族の娘ドリメヌ Dorimène と結婚しようとしている。スガナレルの夢は、妻にかしずかれ子供をつくって自分の子孫を残すことである。自分が子供の中に生き返るというスガナレルの思いには、余命短い老人の願望が読みとれる。

[...] Outre la joie que j'aurai de posséder une belle femme, qui me fera mille caresses, qui me dorlotera et me viendra frotter lorsque je serai las, outre cette joie, dis-je, je considère qu'en demeurant comme je suis, je laisse périr dans le monde la race des Sganarelles, et qu'en me mariant, je pourrai me voir revivre en d'autres moi-mêmes, que j'aurai le plaisir de voir des créatures qui seront sorties de moi, [...]⁽¹⁹⁾

そこでこの結婚の是非について、アリストテレス派の哲学者パンクラース Pancrace や懐疑派の哲学者マルフェリウス Marphurius, エジプト人の占い女にたずねるのであるが、いっこうにらちがあかない。そこで直接ドリメヌに問いただしたところ、彼女はスガナレルが望んでいるようなつつましい女性ではなく、遊び好きでリカスト Lycaste という情夫までいることが判明する。結婚するのはうるさい父親から逃れるためだけだという理由に、スガナレルはすっかり失望してしまう。こうなるとこの結婚は破談にしなければならない。ところがドリメヌにはアルンダス Alcidas という手ごわい兄がいて、決闘をほのめかされ、さんざん棒打ちを食った

すえ、結婚を承知させられてしまう。

この劇はもともと国王の命により急遽準備された娯楽本位のコメディ＝バレエで、初演時には第2幕で国王が「エジプト人」に扮して登場したという⁽²⁰⁾。スガナレルが結婚の是非をたずねる哲学者や占い師たちの配置も娯楽的要素にすぎない。それゆえ、身分違いの結婚という重いテーマにもかかわらず、スガナレルの苦悩や不安は笑いの中にまぎれて、深刻さが残ることはない。スガナレルの後悔や不満は幕間の舞踊の輪の中に消えていってしまう。

このスガナレルの延長線上に位置するのが『ジョルジュ・ダンダンまたはやりこめられた亭主』*George Dandain le Mari confondu* (1668)の百姓の亭主ダンダンであろう。ダンダンは、貴族の娘アンジェリーク *Angélique* を嫁にもらったためにほとんど手をやいている。ところがその女房を咎めたすこともできず、同じ百姓の身分の嫁だったらと身分違いの結婚を嘆く。

[...] Voilà ce que c'est d'avoir voulu épouser une Demoiselle : l'on vous accomode de toutes pièces, sans que vous puissiez vous venger, et la gentilhommèrie vous tient les bras liés. L'égalité de condition laisse du moins à l'honneur d'un mari liberté de ressentiment ; et si c'étoit une paysanne, vous auriez maintenant toutes vos coudées franches à vous en faire la justice à bons coups de bâton. [...] ⁽²¹⁾

アンジェリークはクリタンドル *Clitandre* と密通していて、ダンダン

は証拠をあげてそれを咎めようとしても、結局皆に言い込められて泣き寝入りしなければならない。しかも当の間夫のクリタンドルに詫びをいれなければ許してもらえない。アンジェリークの両親の目を覚ませるために女房とクリタンドルの逢引きの現場をおさえて、女房を家からしめ出したものの最後にはだまされてダンダン自身が家に戻れぬはめになる。結局、嫁の両親に強制されて、女房に自分の行状を跪いて謝罪しなければならない。こうなるとダンダンには何も道は残されておらず、頭からまっさかさまに投身自殺するしか解決策はないというのである。

[...] lorsqu'on a, comme moi, épousé une méchante femme, le meilleur parti qu'on puisse prendre, c'est de s'aller jeter dans l'eau la tête la première.⁽²²⁾

結婚の夢に破れ一人取り残された中年男のダンダンの姿は、滑稽を通りこしてあわれをもよおすのである。

妻の横暴や浮気に苦しめられ泣かされるというこれら2作品の主題は、モリエールの地方巡業時代の作品とされる『バルブイエの嫉妬』*La Jalousie du Barbouillé* にすでにみられる。

女房のアンジェリークは、家庭のくつろぎや家事の役にもたたず、一日に何度も亭主をおこらせ、家庭を守るどころか出歩いて男のところに入りしている。亭主のバルブイエは女房を罰してやりたいのだが、女房の方が強くそれもできない。そこでどうすべきか、博士にたずねてみることにする。

[...] J'ai une femme qui me fait enrager: au lieu de me donner du soulagement et de faire les choses à mon souhait, elle me fait donner au diable vingt fois le jour; au lieu de se tenir à la maison, elle aime la promenade, la bonne chère, et fréquente je ne sais quelle sorte de gens. [...] Mais voilà Monsieur le Docteur qui passe par ici: il faut que je lui demande un bon conseil sur ce que je dois faire.⁽²⁸⁾

バルブイエが、妻アンジェリークと愛人ヴァレールとの密会をつかまえて咎めようとしても、皆に言い込められてしまう。舞踏会に出かけた妻を家から締め出したまではよかったものの、結局だまされて自分自身が家から締め出されてしまう。

結婚について博士に意見を求める設定は、『強制結婚』で踏襲され、亭主が女房にだまされて家から締め出される場面は『ジョルジュ・ダンダン』にうけつがれているのはすでにみてきたところだ。このようにモリエールは、このバルブイエの亭主像と喜劇の場面設定をくり返し用いたことになる。

Ⅳ. 寝取られた亭主

『飛び医者』の下僕のsganarelleから、時期的に最初に変身をとげて登場するのは、『sganarelleまたは女房寝取られ妄想狂』 *Sganarelle ou le Cocu imaginaire* (1660) のsganarelleである。パリ帰還後のモリエールの人気を決定づけた『笑うべき才女たち』は、社会問題を主題にした話題作であった。プレジューズたちを容赦なく批判したためおおいに物議をか

もしたのであるが、翌年発表された『スガナレル』は、前作とはまったく違った個人の内面を主題にした、いわば新分野を開拓してみせた作品であった。

以前のスガナレルはザンニ型の活発な下僕であったものが、ここでは疑り深い、嫉妬心の強い、決断力のない、小心な亭主として登場するのである。しかも題名にもあるように「勝手に思い込んだ」寝取られ亭主であるから、次々に珍妙な事件が起きてくる。ただし本人は大真面目であるから、女房が持っていたレリーの肖像画をつい密通の相手の青年と思い込んで悩むのである。女房をよその男に取られた間抜けな亭主だと世間からばかにされるのが心配なのだ。それにしても男盛りの亭主を捨ててほかに男を持つとは何という女房であるかと憤懣やるかたない。

Ah! pauvre Sganarelle! à quelle destinée

Ta réputation est-elle condamnée!

[...]

Faut-il que désormais à deux doigts l'on te montre,

Qu'on te mette en chansons, et qu'en toute rencontre

On te rejette au nez le scandaleux affront

Qu'une femme mal née imprime sur ton front?

[...] Ah! truande, as-tu bien le courage

De m'avoir fait cocu dans la fleur de mon âge?

Et femme d'un mari qui peut passer pour beau,

Faut-il qu'un marmouset, un maudit étourneau...?⁽²⁴⁾

この劇は父親ゴルジビュス Gorgibus が決めた結婚に娘セリー Célie と恋人のレリーが対抗して最後にはめでたく結ばれるという物語が伏線になっている。その間レリーの肖像画がさまざまな「取り違い」をひきおこし、スガナレルはその間中妻とレリーの不義を妄想して懊悩する。そして相手に堂々と復讐してやると宣言するが、その直後相手を恐れてそれもできない腰抜けぶり。名誉を守って殺されるより、我慢した方が利口だというのである。それで何の不都合があろう、からだが悪くなることもあるまいと理屈をつける。

[…]

Et l'on ne doit jamais souffrir sans dire mot
De semblables affronts, à moins qu'être un vrai sot.
Courons donc le chercher, ce pendard qui m'affronte :
Montrons notre courage à venger notre honte.
Vous apprendrez, maroufle, à rire à nos dépens,
Et sans aucun respect faire cocus les gens !

[…]

Et quant à moi, je trouve, ayant tout compassé,
Qu'il vaut mieux être encor cocu que trépassé :
Quel mal cela fait-il ? la jambe en devient-elle
Plus tortue, après tout, et la taille moins belle ?

[…]⁽²⁵⁾

『スガナレル』の結末においては、肖像画の「取り違い」も解決してス

ガナレルと妻は和解し、若い恋人たちは父親の許しをえて結婚することになる。

スガナレルはコキュにされたのではなく単なる妄想にすぎなかったわけで、結末においてその深刻さの度合は軽い。

このスガナレルの類縁関係としては、ジョルジュ・ダンダンやアンフィトリオン *Amphitryon* をあげることができよう。

前述のように、ダンダンは身分違いの強制された結婚のために妻の姦通をただすこともできず、それどころかそれを甘受しなければならない亭主であった。

さて、『アンフィトリオン』(1668) はモリエールが神話に題材を求めた数少ない作品である。苦境をのりきるために当り狂言が必要で、マレー座 *Théâtre du Marais* のスペクタクルでロトルー *Rotrou* の『二人のソジー』 *Deux Sosies* の改変作『エルキュールの誕生』のひそみにならったのかもしれない⁽²⁶⁾。それに加えて国王とモンテスパン *Montespan* 公爵夫人との情事という当時の宮廷の話題を戯曲化したものともいわれる作品である⁽²⁷⁾。

戦場から戻ったアンフィトリオンは、一日早く訪れた「世にも恐ろしいペてん師」⁽²⁸⁾に妻アルクメース *Arcmène* が奪われてしまったことに気づき、怒り苦しむ。アンフィトリオンは優柔不断のダンダンとは違って名だたる豪勇の武将である。その怒りは激しく、復讐に燃える。そして妻にも覚悟を迫り、真相を糾明しようとする。

Non, non : plus de douceur et plus de déférence,

Ce revers vient à bout de toute ma constance ;

Et mon cœur ne respire, en ce fatal moment,
Et que fureur et que vengeance.

[…]

Après l'indigne affront que l'on me fait connoître,
C'est bien à quoi sans doute il faut vous préparer :
C'est le moins qu'on doit voir, et les choses peut-être
Pourront n'en pas là demeurer.

[…]⁽²⁹⁾

しかしジュピテール Jupiter のからくりによって証人のアルクメーンの兄に会うこともできず苦悶を続けるばかりで、嫉妬心がますます昂じ夫としての恥辱をつのらせる。そのうえ下僕ソジーに扮しているメルキュール Mercure にさんざんからかわれたうえに、妻のアルクメーンが目下別のアンフィトリオンと褥をともにしていると聞けば、その憤激は頂点にたつする。自分のとるべき態度は、この事実を腹立ちまぎれに公表すべきか、家門の名誉のために隠すべきか迷う。ことここに至っては償いを求めることも、容赦する必要もない。復讐あるのみだというのだ。

[…]

Et dois-je, en mon courroux, renfermer ou répandre
Le déshonneur de ma maison ?
Ah ! faut-il consulter dans un affront si rude ?
Je n'ai rien à prétendre et rien à ménager ;
Et toute mon inquiétude

Ne doit aller qu'à me venger.⁽³⁰⁾

そしてアンフィトリオンに化けたジュピテールに本物のアンフィトリオンがナイフをかざして対決してみても、結局神にいどむ人間にすぎず所詮問題にならない。最終的には全能の神ジュピテールと妻を共有したことはアンフィトリオンにとって名誉なことだと、ジュピテール自身がいう。さらに妻を共有した褒美として、アルクメーンはおとしだねのエルキュール *Hercure* を生み、アンフィトリオンは武名を広く全世界にとどろかせ、ジュピテールがその庇護者であることを知らしめるという。

ジュピテールを国王に置きかえたときモンテスパン公爵の心中はいかなるものであったか。国王の妻に対する寵愛はめでたく名誉なことであったのか。このジュピテールに答えるアンフィトリオンの台詞は幕が下りるまで一言もない。夫の苦悩はそれに答えるべき言葉を見つけることはできないであろう。

V. 懲らしめられた亭主

『いやいやながら医者にされ』 *le Médecin malgré lui* (1666) は、傑作『ミザントロップ』の不入りを補うために急遽書かれた作品であった。この作品の起源が中世の説話『田舎医者』 *Le Vilain Mire* にあり、主題が医学や医者への諷刺にあることから、これがモリエール独自のものであったわけではない。しかしモリエールは、『薪作り』 *le Fagotier* (1661) または *le Fagoteur* (1663)、『強制医者』 *le Médecin par force* (1664) をとりあげてきたことからわかるように以前からこのテーマに相当執心であったことは確かである⁽³¹⁾。体裁上3幕になり、以前の類似作品より

整ったはずであるが、夫婦喧嘩、棒打ち、医者の変身などファルスの要素が多い。

ここに登場するスガナレルは、薪作りが仕事の亭主であるが、なまけ者で、酒好きで、勝手気ままで、さらに女好きという性格をもっている。女房のマルティーンヌ Martine は、亭主スガナレルとめぐり合って結婚できたのは幸福だろうという問に対し、こんなに落ちぶれさせたのは亭主のせいだとはげしく罵る。

Qu'appelles-tu bien heureuse de te trouver? Un homme qui me réduit à l'hôpital, un débauché, un traître, qui me mange tout ce que j'ai?⁽³²⁾

女房はスガナレルにさんざん打擲されいじめられたので、仕返しを決意する。ジェロント Géronte の娘リュサンド Lucinde が病気のため医者を探しているのを知って、スガナレルを医者には仕立てようと思いつく。医者であると認めさせるために、スガナレルを大いに叩きのめしてくれとたのむ。棒打ちを食ってにわか医者になったスガナレルは、下僕のスガナレルのように大活躍。薬剤師に扮した青年レアンドル Léandre とリュサンドを駆け落ちさせる。最後にレアンドルは伯父の遺産が手に入り晴れて父親ジェロントから娘との結婚の許しをもらう。女房マルティーンヌは、スガナレルを医者にし名誉を得させたのは妻の功績であると自慢する。

Puisque tu ne seras point pendu, rends-moi grâce d'être médecin; car c'est moi qui t'ai procuré cet honneur.⁽³³⁾

性格的にはザンニ型の下僕の血をひくこの1666年の亭主のスガナレルを最後に、モリエールの作品にスガナレルは再び登場することはない。

このスガナレルの延長線上にくる人物としては『タルテュフ』 *le Tartuffe* (1664) のオルゴン Orgon, 『町人貴族』 *le Bourgeois gentil-homme* (1670) のジュールダン氏 M. Jourdain, 『気で病む男』 *le Malade imaginaire* (1673) のアルガン Argan などがあげられる。

三人の人物とも裕福な町人であるが、それぞれ欠点をもっている。オルゴンはタルテュフにいれあげ、いわば宗教の虜になっている。ジュールダン氏は成上り町人らしく、身分不相応な地位や名譽にあこがれている。アルガンは自ら病氣と思ひ込み、治療にうつつをぬかしている。

このような欠陥人間のわきには必ず良識に富んだ賢夫人や才気煥発の女中が配されている。オルゴンの妻エルミール *Elmire* や女中ドリーヌ *Dorine*, ジュールダン夫人や女中ニコール *Nicole*, アルガンの後妻(で実は悪妻の)ベリーヌ *Béline* や女中トワネット *Toinette* などにたしなめられ、懲らしめられる。

スガナレルの女房マルティエヌはこれらの妻たちの先達といえるだろう。

タルテュフに狂っているオルゴンの目を覚させるのは妻エルミールである。タルテュフはエルミールを誘惑しようとするが、その現場に夫オルゴンを同席させて、偽善者の本当の姿を暴露してみせるのである。オルゴンは机の下に隠れて、タルテュフが妻に言い寄るのをつぶさに聞き、ようやく迷いから覚めるのである。そして、タルテュフに向かって、娘と結婚したうえに妻まで手に入れようとする破廉恥を非難する。

[…]

Ah! ah! l'homme de bien, vous m'en voulez donner!

Comme aux tentations s'abandonne votre âme!

Vous épousiez ma fille, et convoitiez ma femme!

[…]

Mais c'est assez avant pousser le témoignage:

Je m'y tiens, et n'en veux, pour moi, pas davantage.⁽³⁴⁾

しかし、実はこの時はすでに遅く、オルゴンはタルテュフに財産を贈与したり秘密文書を渡した後だったのである。奇跡的な幸運によってしか救われる道は残されていないのであった。

人は金持ちになると地位や名誉が欲しくなるというが、ジュールダン氏もこの種の人物である。ジュールダン氏は、音楽、剣術、ダンス、哲学の先生について教養をたかめ、貴族とつき合って世間から認められようとしている。これは前述のジョルジュ・ダンダンと同種の人物である。

ジュールダン氏は当然のこととして娘を貴族と結婚させようとする。それに対しジュールダン夫人は、結婚というものはお互いの身分に合った組み合わせが無難であり、娘のリュシール Lucile には貧乏で無様な貴族より金持ちで風采のいい紳士の方がふさわしいと、夫の意見に反対する。

Il faut à votre fille un mari qui lui soit propre, et il vaut mieux pour elle un honnête homme riche et bien fait, qu'un gentilhomme gueux et mal bâti.⁽³⁵⁾

結局ジュールダン氏は、トルコの王子に扮したクレアン Cléante に娘のリュシールを嫁にやることに同意する。ジュールダン夫人もそのからくりが解ってこの結婚に賛成する。トルコの王子というのも唐突な感じを受けるが、当時流行の異国趣味であり、娯楽作品にふさわしい幕切れとして取り入れたものであった。シャンポール Chambord の館での国王の慰安のためにリュリーと協力して楽しい幕切れを用意したのである。

『気で病む男』のアルガンの場合もっと深刻である。周囲には厳格なアルガンが、後妻のベリーヌの一见従順な態度にだまされて、全幅の信頼をおいている。それをアルガンに暴露してみせるのが女中トワネットの役目である。主人アルガンが亡くなった場合、残された家人がどう反応するか見届けようというのである。夫が死亡したと信じ込んだ妻ベリーヌは本性を現わし、アルガンに対して悪口雑言をあびせかける。何の役にたつ人間でもなく、人には世話をかけ、いつも流腸をし、薬を飲み、のべつ涙をかんだり、咳をしたり、つばを吐いたり、不潔きわまりない人間だというのである。

[...] Un homme incommode à tout le monde, malpropre, dégoûtant, sans cesse un lavement ou une médecine dans le ventre, mouchant, toussant, crachant toujours, sans esprit, ennuyeux, de mauvaise humeur, fatiguant sans cesse les gens, et grondant jour et nuit servantes et valets.⁽⁴⁶⁾

そしてベリーヌはこの機をのがさずアルガンの証書や現金を奪ってしま

おうとする。これで初めてアルガンは目が覚めるのであるが、女中トワネットはさらに一步進めて娘アンジェリークの反応をみるよう提案する。アンジェリークは父の死を深く悲しみ、生きる望みさえ失い、クレアントとの結婚もあきらめるといっているのである。この娘の殊勝な態度には、いくら頑固で偏屈なアルガンでも感動せずにはいられない。そこでクレアントが医者になるという条件で娘との結婚を許すのである⁽³⁷⁾。

この医学と医者諷刺の喜劇の幕切れも、終幕は医者たちやアルガン自身が医者に扮して踊りの輪をつくるのである。厳しい諷刺を楽しい衣でつむ常套的な手法である。この医学諷刺の作品がモリエールの最後の作品となり、これを上演中舞台上で倒れ不帰の人となったのもなんとなく因縁めいている。

VI. 頑固な父親

『恋は医者』*L'Amour médecin* (1665) のスガナレルは、すでに妻を亡くし、一人娘のリュサンドのふさぎ込んだ様子を心配している初老の町人である。娘の病気の原因はもちろん恋であるが、スガナレルは知るよしもない。

スガナレルが娘を思う気持は、父親が娘の幸せを願う心情にあふれていて実にほほえましい。娘に話しかけても、娘はうわのそらで答えようとしない。しかし父親は我慢強く娘に問いかける。娘の望むものは何でも与え、何でもかなえてあげると話しかける。

[...] J'enrage de la voir de cette humeur-là, Mais, dis-moi, me veux-tu faire mourir de déplaisir, et ne puis-je savoir d'où

vient cette grande langueur? Découvre-m'en la cause, et je te promets que je ferai toutes choses pour toi. [...]⁽³⁸⁾

このようなやさしい娘に対する心情がありながら、父親とはかたくななもので、娘に吐露したやさしい言葉とはうらはらな決意を用意している。何でも子供の思うようにさせる近ごろの風潮に立腹して、反撥する。大切に育てた娘をみず知らずの男の嫁にくれてやるなぞ許しがたいことなのである。財産も娘も自分のものだとして主張する。これが頑固な父親としてのスガナレルの姿である。

[...] A-t-on jamais rien vu de plus tyrannique que cette coutume où l'on veut assujettir les pères? rien de plus impertinent et de plus ridicule que d'amasser du bien avec de grands travaux, et élever une fille avec beaucoup de soin et de tendresse, pour se dépouiller de l'un et de l'autre entre les mains d'un homme qui ne nous touche de rien? [...]⁽³⁹⁾

この3幕からなる喜劇は、1665年9月13日ヴェルサイユ宮殿で国王を慰めるため急遽5日間で書かれ、リュリーが音楽を担当している。主題はモリエールの自家薬籠中のテーマで、医学・医者諷刺のコメディ＝バレーである。国王を慰めるという娯楽作であるから、単純な筋立てに誇張された場面が多く、いわば視覚的笑いが多い作品である。しかし、ここに登場するトメス氏 M. Thomès をはじめとする医者たちの姿があながち単なる誇張された戯画像ではなく、まさに実在した当代の医者たちの肖像だっ

たことも指摘されている⁽⁴⁰⁾。

さて、頑固親父も最終的には周囲の人々のしかけた策略にはまって落城するというのが常套的な筋立てで、すでに眺めた『いやいやながら医者にされ』や『気で病む男』など、医学・医者諷刺の作品と同工異曲といえよう。リュサンドの恋人のクリタンドルが女中リゼット Lisette の助けによって医者に扮し、娘の仮病を治し、頑固でしまり屋の父親の面前で結婚契約書を作り、結納金までまきあげてしまうのである。

父親スガナレルー娘リュサンドー女中リゼットという組み合わせは、前述のアルガンーアンジュリークートワネット、オルゴンーマリアヌヌードリース、ジュールダン氏ーリュシールーニコールなどにみられる定形的な人物配置とみることができる。

このような頑固でけちな父親は、コメディア・デラルテやフェルスに起源をもつ典型人物であり、マニフィコ Magnifico やパンタローネ Pantalone がそれに当る。モリエールの喜劇においてそれを最初踏襲した人物は、同名で登場するゴルジビュスやジェロントである⁽⁴¹⁾。たとえば『スガナレル』に登場するゴルジビュスは、娘セリーに対して声高に宣言する。父親の命令が絶対であり、娘たるもの父親に口答えはできない。いうことをきかない場合は叩くこともできる。父親の方が相手を見る目をもっているので、父親の言うとおりに結婚すべきである。相手の人物は当然金持ちでなければならない。

[…]

Je n'aurai pas sur vous un pouvoir absolu?

Et par sottises raisons votre jeune cervelle

Voudroit régler ici la raison paternelle ?

Qui de nous deux à l'autre a droit de faire loi ?

[...]

Vous pourriez éprouver, sans beaucoup de longueur,

Si mon bras sait encor montrer quelque vigueur.

Votre plus court sera, Madame la mutine,

D'accepter sans façons l'époux qu'on vous destine.

[...]

Informé du grand bien qui lui tombe en partage,

Dois-je prendre le soin d'en savoir davantage ?

[...]⁽⁴²⁾

オルゴンやジュールダン氏やアルガンは、偏屈で頑固な父親であったが、どことなく間の抜けた性格として描かれていた。

それに対し『守銭奴』*l'Avare* に登場するアルパゴン Harpagon は、これまでの頑迷な父親像に加えて、吝嗇漢で好色漢という性格が強調される。いわばゴルジビューススガナレルという典型的父親像をさらに微細に明確にあるいは極端に誇張して描き出したということができよう。

アルパゴンは、娘エリーズ Elise の結婚相手として、50歳に近い、貴族で人柄もよく金持ちであるアンセルム Anselme を婿にもらってやるという。しかも再婚だけれど先妻の子供もいないので幸運だと娘に勧める。

Comment? le seigneur Anselme est un parti considérable,
c'est un gentilhomme qui est noble, doux, posé, sage, et fort

accommodé, et auquel il ne reste aucun enfant de son premier mariage, Sauroit-elle mieux rencontrer ?⁽⁴³⁾

一方アルパゴンは、偶然なことに息子クレアントの恋人マリアンヌに惚れ込んでしまい、持参金を多少なりともせしめたうえで結婚するつもりでいる。もちろんこのような不釣り合いの結婚が成立するはずはなく、最後にはマリアンヌは息子クレアントと結ばれ、父親アルパゴンは振られ役となる。

しかもアルパゴンは、伝統的な頑固親父の性格を子供と金持ちの結婚、結婚経費の節約などで表わすだけではなくて、金貨の箱に偏執する吝嗇漢となっているのである。物欲とか金銭欲などが、アルパゴンの金貨の小箱に象徴されているのである。金貨の小箱を失ったのに気づいて叫ぶアルパゴンの姿は、滑稽さをとおり越えて鬼気迫る異様な姿ではなかろうか。金に対するアルパゴンの妄執ぶりを極端に誇張して描いたものである。

[...] Qui est-ce? Arrête. Rends-moi mon argent, coquin...
Ah! c'est moi. Mon esprit est troublé, et j'ignore où je suis,
qui je suis, et ce que je fais. Hélas! mon pauvre argent,
mon pauvre argent, mon cher ami! [...]⁽⁴⁴⁾

『守銭奴』はプラウトス Plaute の『鍋』*l'Aulularia*, ボワロベール Boirobert の『美しき訴訟女』*la Belle Plaideuse*, ラ・リヴェ Pierre de la Rivey の『幽霊』*les Esprits* などを粉本とする剽窃作品だとのも非難をうけた。また体裁も5幕仕立てとはいえ散文形式である。しかしアルパゴンという人物は、モリエールの徹底した極端な誇張による性格づけに

よって、それら先人の作品の人物像から完全に抜け出し、吝嗇漢の典型として生き返ったのである。それはスガナレルにつながる頑固な父親像の系譜の中の、吝嗇漢の性格を付け加えられた特異な一つの典型となったのである。

Ⅶ. おわりに

以上のように、スガナレルの人物像を検証するのに結婚を基準に分類し、それに類した後続の人物の類縁関係と特徴的性格をみてきた。それゆえ、章分けの順序とスガナレルの登場する作品の発表年代順は一致していないのはいうまでもない。

下僕としてスガナレルが登場する2作品を除いて、結婚にまつわる問題をかかえた中年男としてのスガナレルは5作品に登場した。それらが、それ以後の類似的人物たちの礎型となっていたことも明らかになった。またゴルジビュスのように、スガナレル以前にすでに頑固な父親の定型として登場していた人物もいたのである。バルブイエのように、モリエールの巡業時代にまでその起源をさかのぼる人物もいた。

そして、このスガナレルを常にモリエールが演じたことを思うと、この人物に対するモリエールの愛着が理解されよう。このスガナレルの発展型である多くの人物たち、アルノルフ、アルセスト、ドン・ペードル、ダンダン、アンフィトリオン、オルゴン、ジュールダン氏、アルガン、アルパゴンのうち、アンフィトリオンを除いて全てモリエールが演じた⁽⁴⁵⁾ことを考え合せると、その類縁関係は一層明確になる。ちなみに『アンフィトリオン』においては、モリエールは下僕ソジーを演じたのであるが、それは必然の適役だったのである。つまり、『ドン・ジュアン』の下僕のス

ガナレルがモリエールの配役であるが、このスガナレルとソジーは下僕として密接な類縁関係にあることはすでに明白であるからである⁽⁴⁶⁾。

スガナレルを採用する時期は、モリエールにとってはいつも危機的状況であった。大作が不当りの時期の穴埋めの作品、国王の火急の所望に答えるための娯楽作品などにスガナレルを登用したのである。モリエールはこの人物を主人公にすえると、創造力をかきたてられ、成功作が約束されたも同然であった。

そしてそれぞれのスガナレルの後においては、それらの性格を変形・発展させた人物を創造していくのである。しかし、その手法は徹底して極端に誇張したやり方であって、塑像された人物はますますグロテスクな人物に発展していくのであった。スガナレルの延長線上に位置するこれらの人物たちは、頑固で、利己的で、決断力のない、偏屈な、吝嗇な、いわば人間の弱点を持ちそれを露骨に表わす人物だったのである。

そして、これらの人物がモリエールの典型として生き続けている人物たちである。アルノルフ、オルゴン、アルパゴン、アルガンなどがそれに当る。モリエール自身が、いわば汚れ役のこれらの人物たちを舞台上で倒れて死ぬまで演じ続けたのであった。

なお、別種のモリエールの典型人物、タルテュフやドン・ジュアンについては別に論ずる心要があろう。

註

- (1) 本稿は昭和62年度成城大学特別研究助成による共同研究「ヨーロッパ文化における南北問題」の研究成果の一部である。
- (2) 弘前大学教養部『文化紀要』第12号Ⅱ, 1978, pp.103-127. その際, J.-M. PELOUS, *Les Métamorphoses de Sganarelle*, 《Revue d'Histoire

littéraire de la France》, Sept.-Déc. 1972, pp. 821-849. を参考にしたが、本稿においても多くを負っている。特にスガナレルの性格分類について3系列 cycles に分けている。結婚の系列, 下僕の系列, 町人の父親の系列である。

- (3) 鈴木康司『下僕像の変遷に基づく17世紀フランス喜劇史』大修館書店, p. 217.
- (4) 弘前大学人文学部『文経論叢』第21巻3号, 1986, pp. 81-109.
- (5) Robert JOUANNY, *Œuvres complètes de Molière*, Garnier Frères, ©1962, tome I, p. 324. なお, 以下本書の引用は *Jouanny* と略記する。
- (6) *Ibid.*, p. 324.
- (7) *Ibid.*, pp. 322-323.
- (8) スガナレルはアリストを非難して, 「ほとんど60歳のからかい好き!」 un goguenard presque sexagénaire! (v. 240) と言っているから, アリストの年齢は50数歳。そしてスガナレルより「20歳ばかり」D'une vingtaine d'ans (.v 21) 年取っているのです, スガナレルは30数歳と推定できる。
- (9) *Jouanny*, tome I, p. 360.
- (10) Léon THOORENS, *Le Dossier Molière* in Marabout Université, Gérard & C°, ©1964, p. 97.
- (11) *Jouanny*, tome I, p. 411.
- (12) *Ibid.*, p. 435.
- (13) *Ibid.*, pp. 435-436.
- (14) *Ibid.*, p. 465.
- (15) *Ibid.*, pp. 820-821.
- (16) *Ibid.*, p. 824.
- (17) *Ibid.*, tome II, p. 49.
- (18) *Ibid.*, p. 96.
- (19) *Ibid.*, tome I, pp. 550-551.
- (20) *Ibid.*, p. 543.
- (21) *Ibid.*, tome II, P. 193.
- (22) *Ibid.*, p. 234.
- (23) *Ibid.*, tome I, p. 7.
- (24) *Ibid.*, pp. 233-234.
- (25) *Ibid.*, pp. 239-240.
- (54)

- (26) MOLIÈRE, *Amphitryon*, Introduction et notes par Pierre MÉLÈSE, Droz et Giard, 1950, p. XIV.
- (27) *Jouanny*, tome II, p. 112.
- (28) *Ibid.*, p. 150.
- (29) *Ibid.*, pp. 150-151.
- (30) *Ibid.*, p. 168.
- (31) Eugène DESPOIS et Paul MESNARD, *Œuvres de Molière*, Collection des Grands Ecrivains de la France, Hachette, 1873, tome VI, pp. 6-8.
なお、以下本書の引用は *Despois* と略記する。
- (32) *Jouanny*, tome II, p. 6.
- (33) *Ibid.*, p. 48.
- (34) *Ibid.*, tome I, p. 691.
- (35) *Ibid.*, tome II, p. 485.
- (36) *Ibid.*, p. 841.
- (37) モリエールの喜劇の登場人物としての町人の亭主がすべて偏屈な人間であるというわけではない。たとえば『女学者』のアルモンド Armande とアンリエット Henriette の父親、町人のクリザール Chrysale は、善良で良識に富んだ人物として描かれている。ところが、反対に妻のフィラマンテ Philaminte は女学者で、いわば極端な変人として描かれていて、両者が対照的に配置されていることが解る。
- (38) *Jouanny*, tome I, p. 785.
- (39) *Ibid.*, p. 789.
- (40) *Despois*, tome V, pp. 269-271.
- (41) ゴルジピュスは『飛び医者』、『笑うべき才女たち』、『バルブイエの嫉妬』、『スガナレル』に、ジェロントは、『いやいやながら医者にされ』、『スカパンの悪だくみ』に登場する。
- (42) *Jouanny*, tome I, p. 225.
- (43) *Ibid.*, tome II, p. 256.
- (44) *Ibid.*, p. 302.
- (45) René BRAY, *Molière, homme de théâtre*, Mercure de France, ©1954, pp. 191-221.
- (46) 拙論「Sosie の場合——*Amphitryon* と *Dom Juan* をめぐって——」弘前大学人文学部『文経論叢』第21巻3号, 1986, pp. 81-109.